

委託事業実施内容報告書
平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】

実施内容報告書

団体名：公益財団法人浜松国際交流協会

1. 事業の概要

事業名称	浜松グローバルユース育成検討事業
事業の目的	1990年以降、浜松市は日系ブラジル人を中心とした外国人集住都市として多文化共生社会の構築を目指して事業を展開している。行政を中心に様々な取組がなされているが、特にこれからの浜松を担う重要な構成員となる次世代の育成・支援に力を入れており、第2次浜松多文化共生都市ビジョンでも重点施策として取り上げられている。そうした中、これまでの取組がブラジル政府からも評価され、2020年東京オリンピック・パラリンピックにむけて、ブラジル柔道チームのほか、ブラジルパラリンピックチーム全種目の事前合宿地として、数百人規模の選手団を受け入れることとなった。このことを契機に、浜松市で生まれ育つ外国にルーツを持つ若者が、外国と日本の両方の文化をいかして活躍する地域づくりを行いたいと考える。 平成30年度は、外国にルーツを持つ若者が、ボランティアやイベント等の活動で必要な日本語や日本社会におけるマナーを学んだり、自身の生まれ育った地域の文化や地理、歴史等の魅力について学んだりするための浜松グローバルユース養成講座(仮称)について検討を行う。翌年度には開発した養成講座を実施しグローバルユースの育成を行う。その後、2020年東京オリンピック・パラリンピックで彼らがボランティアやイベント等への参加で関わりがもてるよう、行政、学校、民間組織等と連携し、活躍の場の創出についても検討を行いたい。 本事業を通じて、外国にルーツのある若者の存在やその潜在価値を広く顕在化し、地域における雇用や教育の場の受入拡大など、地域の多文化共生化をより一層深めることを目指していきたい。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	浜松市では、平成20年秋のリーマンショック以降、定住外国人の日本語学習支援に力を入れるために、平成22年1月に浜松市外国人学習支援センター(以下、U-ToC)を開設した。当協会は、U-ToC開設以来、市より委託を受けU-ToCの運営を行っており、平成24～28年度にかけて文化庁の事業委託を受け、日本語教育プログラムの改善を行っている。 浜松市に住む外国人は、中長期的に在留することができる在留資格「永住者」「定住者」「日本人の配偶者」等を持つ住民が全体の約8割を占めることが特徴であり、今後日本に生活の基盤をおく覚悟が読み取れる。また日本での生活が長くなるにつれ、その子供たちの成長も著しく、これからは、彼らを多様な人材として認め、地域を共に創造するための仲間として互いに高めあっていくことが必要である。しかし、子供たちのなかには、日本に住んでいながらも、日本の学校ではなく外国人学校で学んだり、保護者の都合や日本の学校への不適応から学校間を行き来したりし、日本語も十分習得できていない生徒もいる。日本の教育を受けていない若者や、移動が多く学びが積みあがっていない若者が、将来帰国せず、地域社会の構成員となりうる可能性もあることを鑑み、日本語習得を支援することにより全ての若者が輝ける社会を地域全体で創る必要があると考える。
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	平成30年度は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けたグローバルユース養成講座のカリキュラムを開発した。当協会の地域における役割のひとつに、日本で生まれ育ちながらも、日本の学校教育を受けていない(られていない)外国にルーツを持つ若者を、育成することがあると考えている。日本に在住しながらも日本社会との接触が少ない彼らは、社会の中で見えにくい存在となっているため、接触手段となる日本語やコミュニケーションをとる際に必要な場面や相手に応じた言い方等を学び、彼らの持つ潜在価値を社会へアピールすることが必要である。カリキュラム開発会議では、これまでの浜松市とブラジル国とのノウハウを活かし、主にブラジルにルーツを持つ若者を対象とした養成講座を企画した。また、実施したことを成果とするのではなく、内容を重視することで成果物の質を高め、講座に無関係な一般市民にも興味を引かせる工夫をした。また、翌年度に実際に実施できるよう、一般財団法人自治体国際化協会(クレア)へ助成金申請を行った。 外国にルーツを持つ若者が、日本の生活で気になっていたことや知りたいことについて、日本語でアンケートやインタビューをして発表する講座(プロジェクトワーク)を行った。日本語で日本人住民に尋ね、調べた結果を日本語でまとめ、それを発表することで、日本語4技能の向上を図った。本ワークの実施にあたり、地域の県立高校、外国人学校と連携を深めることができ、学習を通じた交流を恒常的に行うための話し合いが継続されることとなった。 上記講座(プロジェクトワーク)で調べた内容を発表するイベントを行い、地域の活力となりうる彼らの存在を広く発信した。発表は、日本語で行うものを一度だけの予定だったが、県立高校と外国人学校との連携が深まったため、急遽もう2回追加された。その結果、日本語版、複言語版、母語版と違ったバリエーションで発表会を行うこととなり、本ワークを実施するメリットを生徒、教員、学校のそれぞれが実感する機会となった。
事業の実施期間	平成30年6月～平成31年3月 (10か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	佐藤 宏明	浜松市企画調整部国際課 課長
2	嶋田 和子	一般社団法人アクラス日本語教育研究所 代表理事
3	坂本 勝信	常葉大学経営学部 准教授
4	松本 雅美	学校法人ムンド・デ・アレグリア学校 校長
5	山崎 仁資	静岡県立浜松湖南高等学校 校長
6	今中 秀裕	公益財団法人浜松国際交流協会 業務執行理事



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成30年5月1日 (火) 15:00～16:30	1時間30分	浜松市外国人学習 支援センター	佐藤 宏明、嶋田 和子、坂 本 勝信、松本 雅美、山崎 仁資、今中 秀裕	1. 委員長選出 2. 事業計画の検討
2	平成30年10月30日 (火) 13:30～15:00	1時間30分	浜松市外国人学習 支援センター	佐藤 宏明、嶋田 和子、坂 本 勝信、松本 雅美、山崎 仁資、今中 秀裕	1. 浜松グローバルユース養成講座カリキュラム開発会議中間報告、自治体国際化 協会への申請報告 2. 日本語プロジェクトワーク中間報告 3. 日本語プロジェクトワーク発表会予定
3	平成31年2月27日 (水) 14:00～15:30	1時間30分	浜松市外国人学習 支援センター	佐藤 宏明、嶋田 和子、坂 本 勝信、松本 雅美、山崎 仁資、今中 秀裕	1. 浜松グローバルユース養成講座カリキュラム開発会議報告、自治体国際化協会 の結果報告、次案の提案 2. 日本語プロジェクトワーク報告 3. 日本語プロジェクトワーク発表会報告 4. 事業評価

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	地域国際化協会として、外国人学校と連携し、実態の見えにくい在籍生徒への日本語支援を強化した。また、カリキュラムの開発やプロジェクトワークの実施にあたって、浜松市の関係課(国際課、スポーツ振興課)や、県立高等学校、外国人学校等と連携を図り、今後の継続的な関係性の維持に結び付いた。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	事業統括は、全ての取り組みにおいて、企画、マッチング、外部機関との渉外、関係者との調整、事業の実施、講師や学習者との相談業務、助言等を行った。
----------	---

3. 各取組の報告

＜取組1＞											
取組の名称		浜松グローバルユース養成講座カリキュラム開発会議									
取組の目標		2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に、外国にルーツのある若者が活躍できる社会をつくるため、平成30年度は、グローバルユース養成講座のカリキュラムを開発する。									
取組の内容		平成30年度は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けたグローバルユース養成講座のカリキュラムを開発する。当協会の地域における役割のひとつに、日本で生まれ育ちながら、日本の学校教育を受けていない(られていない)外国にルーツを持つ若者の育成があると考えている。日本に在住しながらも日本社会との接触が少ない彼らは、社会の中で見えにくい存在となっているため、接触手段となる日本語やコミュニケーションをとる際に必要な場面や相手に応じた言い方等を学び、彼らの持つ潜在価値を社会へアピールすることも必要である。また、カリキュラム開発会議では、日本語学習のほか、自身が住んでいる地域の特色や文化を学ぶ機会や、パラリンピックを通じた障害者スポーツを学ぶことで、介護職の魅力や地元での就職にも関心が向くような内容を検討したい。会議では、ブラジルチームのホストタウンとして誘致した市のスポーツ振興課や国際課等、行政や学校、民間組織等との連携についても検討を行う。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		将来の地域構成員となる外国にルーツのある若者を周辺化せず地域で健全に育成することが、浜松市が真の多文化共生都市に近づくことと考える。そのために、日本語教育の大切さを広く周知し、2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に様々な関係機関と連携を深めるための会議を実施した。									
取組による日本語能力の向上		外国にルーツのある若者が日本語や日本の生活文化を理解することはオリンピックの後であっても重要であると考え。そのために、取組2のプロジェクトワークを検証し、どんな日本語教育が必要か検討することで、次年度実施への準備を進めた。									
参加対象者		日本語教育専門家、外国人学校日本語教師、市関係課担当者						参加者数 (内 外国人数)		8人(人)	
広報及び募集方法		紹介を受けたり関係者へ呼びかけたりした									
開催時間数		総時間10時間45分(空白地域0時間)				内訳 時間 × 回					
主な連携・協働先											
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
										8	
※該当する場合のみ											
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	出席者数	研修のテーマ	概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	平成30年8月9日(木) 16:00～17:30	1.5	浜松市外国人学習支援センター	3	-	2019年度に実施予定の浜松グローバルユース養成講座の趣旨確認 内容のアイデア出し 外国人のユース向けと対象を狭めず、国籍問わず受講者が一緒に作業できる様な内容にしたいー連携 パートナー校や団体を探し呼びかける 受講後の活躍の場の創出について		-	坂本勝信(常葉大学)、岡則子(ムンデアレグリア)、内山夕輝(HICE)		
2	平成30年8月27日(月)	0.5	浜松市外国人学習支援センター	2	-	高校における養成講座とのコラボレーションの実現可能性について 来年度実施の場合、相談するタイミングについて(事業計画スケジュールのお伺い)		-	岩崎典子(静岡県立浜松湖南高等学校副校長)、内山夕輝(HICE)		
3	平成30年8月28日(火) 9:35～10:05	0.5	浜松市外国人学習支援センター	2	-	地域連携について 常葉大学の地域貢献センターとの連携について 聴講生としての参加の可能性について		-	坂本勝信(常葉大学)、内山夕輝(HICE)		
4	平成30年8月29日(水) 15:00～15:45	0.75	浜松市役所スポーツ振興課	4	-	来年度の養成講座についての趣旨説明 修了生の活躍の場の可能性について スポーツ振興課が必要とする人材について 合宿時の交流会等の開催の予定について		-	中村浩康(浜松市役所スポーツ振興課)、鈴木清光(同課)、加藤智春(HICE)、内山夕輝(HICE)		

5	平成30年9月5日(水) 10:40～12:10	1.5	ZOOM会議	3	－	ヒアリングの結果報告 養成講座の目的の再考 修了生の活躍の場として、ブラジルチームのお手伝いではなく、浜松市におけるブラジルチームおもてなし空 気醸成のお手伝いかどうか ブラジルチームアンバサダーとしての活動を検討(対市民への働きかけ) 養成講座の実施時期について プロジェクトワークの取り入れ方についてー日本語に特化せず、調べ学習としての要素を取り入れる グループワーク中心とする 国籍問わず広く募集したい	－	坂本勝信(常葉大学)、岡則子 (ムンドデアレグリア)、内山夕輝 (HICE)
6	平成30年9月18日(火) 14:00～15:30	1.5	ZOOM会議	4	－	カリキュラム素案についてのアイデア出し 大目的、小目的、到達目標の確認 対象者は国籍を問わない 受講者が主体的に参加する工夫 成果物をどう活用するかー聴衆に付き合ってもらうのではなく、見聞きしたくなるものー動画の製作はどうか 募集方法、実施時期、講師選定、連携先の確保等について	－	坂本勝信(常葉大学)、岡則子 (ムンドデアレグリア)、中田貴子 (With U-Net)、内山夕輝(HICE)
7	平成30年10月5日(金) 9:30～11:00	1.5	ZOOM会議	5	－	(一財)自治体国際化協会(クレア)へ申請した内容の説明 日本人外国人問わず浜松地域のユース育成とすると、ブラジルチームのアンバサダーとこだわらなくても良いのでは。中国やフィリピンのユースが参加するかもしれない ユースを対象にした場合の開講日時も重要 OMを作るなら質の良いものを。講師は専門家にも関わってもらいたい 単に動画作成講座にせず、浜松の特性や講座の目的を理解してもらうために、専門家を交えた会議が必要 ークレアに提出した企画書を改訂して次回はそれをたたき台に話す	－	坂本勝信(常葉大学)、岡則子 (ムンドデアレグリア)、中田貴子 (With U-Net)、敷浪のぞみ(早稲田大学大学院)、内山夕輝 (HICE)
8	平成30年10月19日 (金) 10:00～11:30	1.5	ZOOM会議	5	－	改訂版の説明(変更点:10→16回(オリエンテーション、計画、試写会、再編集を追加) 振り返りの回を追加した方が良いのでは。 政府の動きを見ていると、これからは多国籍の人たちとの共生になる。浜松とブラジルの縁は深い、2019年の講座としてブラジルチームをテーマとするのは時代錯誤ではないか。 OMを作ることが目的でなく、若者の存在を可視化することが重要。オリンピックは手段。 この地域の若者の価値を発信するならオリンピックでもスポーツでもなくてよいのでは。 ーテーマを再考する必要有? 著作権について調べる必要有	－	坂本勝信(常葉大学)、岡則子 (ムンドデアレグリア)、中田貴子 (With U-Net)、敷浪のぞみ(早稲田大学大学院)、内山夕輝 (HICE)
9	平成30年11月9日(金) 10:00～11:30	1.5	ZOOM会議	5	－	運営委員会でのアドバイスを踏まえて方向性の再検討 (ブラジル人が集住した都市だからこそ積みあがったノウハウをいかすべき。軸はぶれない方がよい) 開催時期について 対象者の募集について 講師候補について	－	坂本勝信(常葉大学)、岡則子 (ムンドデアレグリア)、中田貴子 (With U-Net)、敷浪のぞみ(早稲田大学大学院)、内山夕輝 (HICE)

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第5回 平成30年9月5日(水) 10:40～12:10】

これまでの外部ヒアリングの結果を報告し、養成講座の目的を再考した。

若者が関わるとなると、通訳のような専門的な役割は難しい。そのため、ブラジルチームのお手伝いではなく、浜松市におけるブラジルチームおもてなし空気醸成のお手伝いはどうかという案が出た。また、養成講座の実施時期についても検討が必要との意見が出た。

取組2で行っているプロジェクトワークをどう取り入れるかについては、日本語に特化せず、調べ学習としての要素を取り入れ、グループワークを中心とすることで、他者の考えを理解する機会になるという意見が出た。また、外国にルーツのある若者については、国籍問わず広く募集したいという意見で一致した。



○取組事例②

【第9回 平成30年11月9日 10:00～11:30】

運営委員会でのアドバイスを踏まえて方向性の再検討を行った。ブラジル人が集住した都市(外国人集住都市)だからこそ積みあがったノウハウをいかすべき。軸はぶれない方がよいという考えのもと、ブラジルチームに絡めた内容で中身を詰めることとなった。

日本語プロジェクトワークの要素は取り入れたいが、実際に行うには長期の関わりがないと良いものがないのではないかという意見が出た。

また、養成講座の時期や実施曜日については意見が様々出たが、学業に支障のない週末の午前中で行い、夏休みに活動ができるようにと計画した。

対象者の募集については、内容的に大学生～高校生が主となることから、学校関係へ募集協力を依頼することとした。

講師については、ブラジル人のフリージャーナリストを紹介してもらい、その方に打診することが決まった。



(2) 目標の達成状況・成果

カリキュラム開発会議を経て、下記の様な案が作成された(別紙にて詳細)。内容が日本語教育に特化しないことから、文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業としては適さないため、翌年度実施のために一般財団法人自治体国際化協会の多文化共生のまちづくり促進事業へ申請を行った。

「浜松グローバルユース養成講座～ブラジルチームのアンバサダーになって、応援CMを作ろう～」※別紙参照

32時間(2時間×16回) 土曜日10:00～12:00 会場:クリエート浜松

「ブラジルオリンピック・パラリンピックチーム応援CMコンテストinグローバルフェア」2020年2月8日(土)(予定)

(3) 今後の改善点について

当初の企画段階では、外国にルーツのある若者が、オリンピックの機会に乗じて、ブラジル選手団のお手伝いや、交流会でのボランティアなど、ブラジルチームと日本社会との間の架け橋となるような育成内容を思い描いていた。

しかし、ブラジル選手団の事前合宿を誘致した浜松市のスポーツ振興課に、どんな人材が必要で、どんな役割を期待するかを伺いに行ったところ、通訳ができるボランティアを募集する予定であること、また、オリンピックの試合直前に交流会を行う予定は一切ないことが回答として得られた。そのため、会議では、高校生年代の若者ができる範囲を再検討し、日本社会側へのブラジル(オリンピック・パラリンピックチーム)の理解を促す働きかけについて議論し、ブラジルチーム応援CM作成を軸にした養成講座を企画した。

その後、時期を同じくして政府の外国人労働者受入改正案等が示され、今後はより多国籍住民の増加が進むと考えられることから、ブラジルを強調せずオリンピックをテーマにすれば良いのではないかと議論になった。その他、想定しうる課題として著作権への対応があがった。これについては現在調査中であるが、有名選手の画像や動画を使うのは容易ではないと思われる。

また、そもそもオリンピックはきっかけにすぎず、若者の育成という目的に立ち返るならば、オリンピックをテーマとして掲げなくても良いのではないかと意見が出た。テーマについては、作品の製作や講座運営が実現可能なものであり、大目的(グローバルとローカルな視点を持つ若者の育成と情報発信)から外れないものとして再考の必要性があると考えたが、運営委員会において、これまでのブラジル人受入れの実績を見直し、養成講座を「ブラジルテーマ」にあえて特化することで、パイロット事業となる。来る多国籍化の将来に、このノウハウが活かせるはず。という意見があがり、再再考することとなった。

こうした流れの中から、次年度実施のための予算を獲得するため、一般財団法人自治体国際化協会に事業申請を行ったが不採択となってしまった。あらためて予算の獲得を検討する必要がある。

＜取組2＞										
取組の名称		外国にルーツのある若者のための日本語プロジェクトワーク								
取組の目標		外国にルーツを持つ若者が、日本の生活で気になっていたことや知りたいことについて、アンケートやインタビューをして発表するワークを行う。日本語で日本人住民に尋ね、調べた結果を日本語でまとめ、自らがそれを発表することで、日本語4技能の向上を図る。また、このワークを通じて、若者らが日本人の考え方や日本社会の慣習について関心を深める機会とし、日本での自身の生活をより充実させるためにも日本語学習の継続が重要であることに気づく機会とする。								
取組の内容		まず、本取組では平成28年度の文化庁委託「浜松版地域日本語教師養成事業」取組2の日本語ブラッシュアップ講座で行った「プロジェクトワーク」のノウハウをもとに、外国にルーツのある若者を対象に作り変えるカリキュラム改善会議を行う。これを通じて、今年度のプロジェクトワークが、外国にルーツのある若者がオリンピック・パラリンピックのおもてなしに資する人材として必要な日本語能力を身に付けることができるカリキュラムとなるよう、既存のカリキュラム改善に努める。 本取組の主となるプロジェクトワークでは、外国にルーツのある若者自身が日本で生活していて気になることをテーマとし、それについて日本語でアンケートを作ったり、直接インタビューをしたりして調べる。調べた結果を分析し、表や文章でまとめ、考察や感想を加える。それらを発表するためにスピーチの練習を行い、発表会で発表する。発表後交流会で、聴衆からの質問に受け答える。最後に振り返りを行う。こうしたプロジェクトワークを通して、日本語の運用能力を高めたり、読み書きの能力を高めたりすることが期待される。								
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動									
取組による体制整備		教室開催に辺り、地域の県立高校、外国人学校との間の橋渡しに寄与することができた。学校間の学習交流にまで発展したことで、今後も一過性のイベントで終わらず、各校のカリキュラムに組み込み恒常的に連携が持てるよう検討することとなった。								
取組による日本語能力の向上		日本語で日本人住民に尋ね、調べた結果を日本語でまとめ、それを発表することで、日本語4技能の向上を図った。また、同世代の高校生とワークを通じた交流を行ったことで、これからの日本での生活をより充実させる意識や日本語学習の継続意欲を涵養することができた。								
参加対象者		外国にルーツのある若者					参加者数 (内 外国人数)		16人(16人)	
広報及び募集方法		外国人学校に学習者募集の協力を依頼した								
開催時間数		総時間109時間25分(空白地域0時間)			日本語プロジェクトワーク 計73時間40分(青い月クラス36時間20分、あかつきクラス37時間20分) カリキュラム改善会議 35時間45分(全30回)					
主な連携・協働先		浜松市、With U-Net、常葉大学、学校法人ムンド・デ・アレグリア学校、静岡県立浜松湖南高等学校								
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシ ア	ペルー	フィリピン	日本
			13					3		
※該当する場合のみ										
実施内容										
【青い月クラス】										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	テーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	平成30年6月7日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	イントロダクション	・自己紹介(申します、よろしく致しますの導入) ・プロジェクトワークとは？ ①ポスターにて視覚でうったえる →最終ゴールを見せ、どのような流れで進めるかをイメージ(ポルトガル語を含む) ②昨年の交流会VTR視聴 →聞き取りやすい物、内容が簡単な物 ・スキーマの活性化 →学生の興味関心の引き出し		中田貴子		
2	平成30年6月14日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	テーマの提示・アンケート1	・アンケート対象者を提示(インタビューを含むアンケート対象者は30人まで) ・数種のテーマを提示(前週の意見を基に。また、学生がどうしても聞きたいことがあればそれも可) ・数種のアンケート案提示 →テーマに合わせて、6個の質問を用意。うち自由記述は2つの中の1つを選ぶ。Q2～Q5の中から3つ選ぶ。そして1つ自分で質問を考える。 ・「から」の確認(レベルを確認してできそうだったら「のぞ」)		中田貴子		
3	平成30年6月19日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	アンケート2・「はじめに」	・「はじめに」の作成(導入と筆記) ・物の授受(確認程度) ・アンケート作成(1～2問を自分で考える)		中田貴子		

4	平成30年6月21日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	アンケート3	・アンケート完成	中田貴子	
5	平成30年6月26日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	アンケート4・中間発表「はじめに」・社会言語能力養成1・語彙テスト1	・アンケート最終チェック ・小テスト① ・中間発表「はじめに」 ・社会言語能力養成(切り出し)	中田貴子	
6	平成30年6月28日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	社会言語能力養成2・語彙テスト2・インタビュー1	・社会言語能力養成(聞き返し) ・小テスト② ・インタビュー表現の確認と作文	中田貴子	
7	平成30年7月5日 (木) 14:15～15:20	65分	浜松市外国人学習支援センター	9	社会言語能力養成3・インタビュー2	・社会言語能力養成(相づち) ・インタビュー練習 ・あかつきクラスと合同ミーティング(湖南高校訪問の打ち合わせ)	中田貴子	
8	平成30年7月12日 (木) 13:55～15:25	90分	静岡県立浜松湖南高等学校	9	湖南高校訪問(アンケートの依頼をし、交流)	・アンケートを実際に配り、直接質問などを受ける	中田貴子	協力者:静岡県立浜松湖南高等学校英語科1年生41人
9	平成30年7月17日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	インタビュー3	・インタビューをする(県立大、常葉大学生) ・振り返り	中田貴子	協力者:静岡県立大学6人、常葉大学学生5人
10	平成30年7月19日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	インタビュー4	・インタビューをする(With U-netの方など) ・振り返り	中田貴子	協力者:With U-Net9人
11	平成30年8月2日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	集計1	・小テスト③ ・お礼状を書く ・集計方法の導入・練習	中田貴子	
12	平成30年9月20日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	グラフ1	・小テスト④、⑤ ・グラフの書き方 ・アンケート集計の確認 ・グラフ作成(下書き)	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
13	平成30年9月27日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	グラフ2 集計結果の説明文1	・小テスト⑥ ・グラフの説明文導入/作成 ・グラフのチェック・色塗り	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
14	平成30年10月4日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	グラフ3 集計結果の説明文2	・小テスト⑦ ・グラフのチェック/色塗り ・グラフの説明文チェック	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
15	平成30年10月11日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	グラフ4 集計結果の説明文3 考察1	・小テスト⑧ ・グラフのチェック ・説明文のチェック ・考察の作成	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき

16	平成30年10月18日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	グラフ5 考察2 はじめに(改)1	・小テスト⑨ ・グラフの間違えを修正 ・考察の作成 ・はじめにの書き直し	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
17	平成30年10月25日 (木) 14:00～16:00	120分	浜松市外国人学習支援センター	9	まとめ1 はじめに2 自己紹介1(宿題)	・司会と発表の順番を決定 ・まとめ完成(ポルトガル語で作成) ・はじめに完成 ・自己紹介(宿題)	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
18	平成30年11月1日 (木) 13:55～16:00	120分	浜松市外国人学習支援センター	9	まとめ2 自己紹介2	・まとめ清書 ・自己紹介のチェックと清書	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
19	平成30年11月8日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	リハーサル1	・11/29の発表者を決定 ・リハーサル	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
20	平成30年11月22日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	リハーサル2	・11/24、29日のスケジュールを確認 ・リハーサル	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
21	平成30年11月29日 (木) 13:45～15:00	75分	浜松市外国人学習支援センター	7	第2回発表会(複言語版)	・2回目発表会(複言語版) ・日本語発表(ポルトガル語資料つき) ・スペイン語発表(日本語資料つき) ・ミックス言語グループでワークショップ	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき 参加者:静岡県立浜松湖南高等学校英語科1年生41人、ムンド・デ・アレグリア学校42人、常葉大学5人
22	平成30年12月13日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	振り返り1	・小テスト⑩ ・11/24発表会ビデオ視聴 ・自己評価	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
23	平成30年12月20日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	9	ポスター作成1	・小テスト⑫⑬ ・ポスター作成	中田貴子	講義補助者:森川晴美、八木さつき
24	平成31年1月17日 (木) 13:00～14:30	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	第3回発表会(母語版)	・3回目発表会 ・日本語で作成したポスターを使って母語で発表	中田貴子	講義補助者:内山夕輝 参加者:ムンド・デ・アレグリア学校41人、教員2人

【あかつきクラス】

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	テーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	平成30年6月7日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	自己紹介・テーマ探し①	・「私と◎」で自己紹介 ・講師の「私と東京」とQ&Aを通して、どのような質問をすると良いか考える。 ・スキーマの活性化・興味関心の掘り起こし「私と◎」からのブレインストーミング ・「ことばリスト」の説明 ・使用可能機器などの確認	敷浪のぞみ	
2	平成30年6月14日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	テーマ探し②・プロジェクトワークの進め方について	・ブレインストーミングの続きーテーマ決定 ・テーマから調査対象を考える ・質問項目を考える(テーマに合う質問項目) ・完成までのスケジュールと自分のゴール設定	敷浪のぞみ	
3	平成30年6月19日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	導入文作成①&アンケート作成①	・導入文を書き進める ・クラスメイトの導入文にピアでコメントする ・テーマから調査対象者を決定する ・質問の種類を知る(選択肢・自由記述) ・質問項目を考える	敷浪のぞみ	

4	平成30年6月21日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	アンケート作成②と検討	・アンケート作成続き ・クラス内でアンケート検証およびコメント	敷浪のぞみ	
5	平成30年6月26日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	アンケート作成③ &評価項目のアイデア	・アンケート完成 ・自己評価のための項目を考える	敷浪のぞみ	
6	平成30年6月28日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	自己評価を考える &調査の依頼	・自己評価のための項目を考え、整理する ・クラスで考えた自己評価項目で、導入文とアンケートについて評価する ・調査をイメージし、どのように依頼をするか考える ・場面に合わせて、依頼の言い方を変え、ロールプレイで練習する	敷浪のぞみ	
7	平成30年7月5日 (木) 14:15～15:20	65分	浜松市外国人学習支援センター	6	湖南高校訪問を計画する	・湖南高校で行う調査の進め方をイメージし、司会や進め方の説明の言葉を確認する。 ・自分の調査の説明を短く説明する準備をする (以下青い月との合同クラス) ・湖南高校での調査の役割分担を決め、進め方を確認する ・一緒に調査を行うグループの間でお互いのアンケートを見ておく	敷浪のぞみ	
8	平成30年7月12日 (木) 13:55～15:25	90分	静岡県立浜松湖南高等学校	7	湖南高校訪問(交流会)	・湖南高校を訪問し調査を行う。 ・調査の説明・進め方・調査のお礼を担当者が言う ・各グループでアンケートに対する質問などに答える	敷浪のぞみ	協力者:静岡県立浜松湖南高等学校英語科1年生41人
9	平成30年7月17日 (火) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	インタビュー調査をする①	・湖南高校でのアンケートを振り返り、改善点を考える。 ・大学生(常葉大学、静岡県立大学)を対象にインタビューを行う ・自分のインタビューを大学生と共に振り返り、評価項目を考える。 ・インタビューについて自己評価を行う。	敷浪のぞみ	協力者:静岡県立大学学生6人、常葉大学学生5人
10	平成30年7月19日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	インタビュー調査をする②	・前回のインタビューの映像を見て、振り返る。改善点を考える。 ・大人を対象にインタビューを行う。 ・インタビューについて自己評価を行う。 ・今までのアンケートをまとめて数え、次の集計に備える。	敷浪のぞみ	協力者:With U-Net9人
11	平成30年8月2日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	調査結果の集計をする	・調査結果の集計の全体的なイメージを持つ ・回答の集計方法を確認する	坂本勝信	
12	平成30年9月20日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	調査結果を整理する①	・調査結果をグラフに表す ・グラフを説明する表現を確認する ・発表までにやらなければいけないことを確認する	敷浪のぞみ	
13	平成30年9月27日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	調査結果を整理する②	・調査結果をグラフに表し、説明する ・自由記述回答を整理する ・導入文を完成させる	敷浪のぞみ	
14	平成30年10月4日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	調査結果を整理する③	・調査結果について説明する ・自由記述回答を整理する ・発表の形式について考える	敷浪のぞみ	
15	平成30年10月11日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	調査結果についての意見を表現する①	・調査結果についての意見を表現する ・授業のゴールとその意味について再度確認する	敷浪のぞみ	

16	平成30年10月18日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	調査結果についての意見を表現する②	・引用・まとめの形式を知る ・調査結果についての意見を表現する	敷浪のぞみ	
17	平成30年10月25日 (木) 14:00～16:00	120分	浜松市外国人学習支援センター	6	調査結果をまとめる	・調査のまとめを書く ・発表会の招待状を書く	敷浪のぞみ	
18	平成30年11月1日 (木) 13:55～16:55	180分	浜松市外国人学習支援センター	7	資料を完成させる	・各自資料を完成させる ・リハーサル・本番に向けてやることを確認する	敷浪のぞみ	
19	平成30年11月8日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	リハーサル①	・リハーサルを行い、改善点を見つける ・リハーサルを受けて、資料の修正点を直す	敷浪のぞみ	
20	平成30年11月22日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	リハーサル②	・2回目のリハーサルを行い、本番のシミュレーションをする	敷浪のぞみ	講義補助者：内山夕輝
21	平成30年11月29日 (木) 13:45～15:00	75分	浜松市外国人学習支援センター	7	振り返り① 第2回発表会＆交流会(複言語版)	・第2回発表会に向けて発表会の振り返りを行う	敷浪のぞみ	講義補助者：森川晴美、八木さつき 参加者：静岡県立浜松湖南高等学校英語科1年生41人、ムンド・デ・アレグリア学校42人、常葉大学5人
22	平成30年12月13日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	7	プロジェクトワークの振り返り①	・発表会の振り返りを行う。自己評価とクラスメイトへのフィードバックを行う。 ・プロジェクトワーク全体をととした振り返りを行う。	敷浪のぞみ	
23	平成30年12月20日 (木) 13:55～15:25	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	プロジェクトワークの振り返り②	・プロジェクトワーク全体をととした振り返りを文章にする。 ・ポートフォリオを完成させる	敷浪のぞみ	講義補助者：内山夕輝
24	平成31年1月17日 (木) 13:00～14:30	90分	浜松市外国人学習支援センター	6	第3回発表会(母語版)	・プロジェクトワーク参加者以外のムンド生に対して自分のプロジェクトを説明し、意見交換をする	敷浪のぞみ	講義補助者：内山夕輝 参加者：ムンド・デ・アレグリア学校41人、教員2人

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第8回 平成30年7月12日】

地域の県立浜松湖南高校(英語科1年生)へ、アンケートを行うために訪問した。訪問する前の回で、青い月クラス、あかつきクラスで合同授業を行った。日本語レベルの高いあかつきクラスの学習者がリードする形で、「調査の説明」「進め方の説明」「お礼」について、どう表現するかを練習したが、もう少し詳細まで準備ができると良かった。

当日は、学習者も県立高校の生徒も、最初はお互いに緊張している様子で、アンケートを頼む→黙々と回答するという流れだった。講師が間に入り、対話を促進する呼びかけを行ったところ、その後は声が上がった。終了後も発表会の日程について会話をしている姿が見られ、調査をきっかけとした交流が達成できたように思う。



○取組事例②

【第9.10回 平成30年7月17日.19日】

大学生や大人に対し、学習者が調べているテーマについてインタビューを行った。前回は同年代の高校生に向けてのアンケートであったが、今回は年代の違う方々へのインタビューなので、前回のビデオを見ながらの振り返りと、今回注意する点について意見を出す活動を最初に行った。その後、協力者に会場入りしてもらい、インタビュー活動を行った。回を重ねるごとに、学習者の視線や声の大きさなどに良い変化が見られたのは良かった点である。また、その後、協力者にアンケートへ記入をお願いしたところ、交流は楽しかったが日本語レベルによっては実際の生活は難しそうだな、時々友達言葉が出ていたが丁寧に接してくれたので一所懸命さが伝わったなど日本語についてのコメントの他、普段全く考えたことのない視点のインタビューを受けて刺激になった、日本の高校生よりもコミュニケーション能力が高いと感じたなど、異文化体験をしたことへの反応も見られた。



(2) 目標の達成状況・成果

日本語プロジェクトワークでは、調べたいことをアンケートやインタビューを用いて調べる必要があるが、県立浜松湖南高校、常葉大学、静岡県立大学、With U-Netの協力のもと実施することができた。参加した生徒にとっては、年齢や立場の違いでの日本語の使い分けについても学ぶ機会となり、本ワークの目標の一つである、社会言語能力の養成を行うことができた。交流活動も楽しかったようで、同年代の日本人とやりとりしたことが日本語学習意欲の刺激になったと思われる。協力した日本人側らにとっても、普段の生活では気づかないことについて質問を受けたといった声があり、多様性のもたらす新しい価値観を発見する機会になったのではないと思う。また、こうした互いに学びのある学習交流は本ワークならではの成果だと思っている。今後もこうした学習活動を通じて、異文化理解を促進していきたいと思う。

カリキュラムの最後に、振り返りの時間を十分に取れたことは良かった。発表で終わりではなく、自己評価や他己評価をしながら、できたこと、できなかったことなど、自身の学習を振り返ることができたように思う。本ワークの継続を望む声も聞けたので、今後も連携を取りながら実現可能に向けて検討していきたい。

(3) 今後の改善点について

図らずも、日本語レベルが違う2つのクラスが同時に進行することになったが、それぞれに違った課題があった。

青い月クラスにおいては、生徒らの日本語レベルと本ワークを実施するための日本語レベルが離れていたため、受講した生徒と講師が産出の苦しみを味わった。こうしたミスマッチが起こらないよう受講前のレベルチェックを取り入れるなど検討したい。また、実施側もカリキュラムに捉われすぎず、状況に応じて内容を変更するなど臨機応変な対応ができるようにしていきたい。(今回はカリキュラム改善会議でその都度、状況確認をすることで対応した)

あかつきクラスにおいては、日本語である程度の作業ができる生徒らに、さらに日本語力を磨くための動機づけに苦労した。語彙や知識を増やすことで表現力を学んだり、ワークを通じて時間管理能力や業務遂行能力を学んだりすることは、卒業後、社会人として役に立つことを根気強く伝え続ける必要があると思った。

全体としては、もう少し時間の余裕が欲しいところである。クラス間の交流や、発表会の中身の充実など、カリキュラム改善の余地はある。また、できればこの成果をテキストにするなど形に残したいと思ったが、当初計画になかったため予算と期間がなく一旦寝かすこととなった。別の形で発信するなど機会を伺っていこうと思う。

＜取組3＞											
取組の名称		日本語プロジェクトワーク発表会「調べ学習発表会」									
取組の目標		浜松で育つ外国にルーツのある若者が、地域の活力となりうるグローバル人材として社会に広く認知されるよう、プロジェクトワークでまとめたことを、発表会で広く発信する。発表した若者が日本語での成功体験を増やすことで、日本語学習の継続意欲を涵養する機会とする。また、聴衆にとっては、普段気づいていない日本の良さや課題について発見する機会とし、多文化共生への理解を促進する。									
取組の内容		浜松市は外国人が多く集住する都市であり、職場や学校、地域において、日本人、外国人間の接触場面は少なくないのだが、相互理解がさほど進んでいないことが課題の一つである。ホスト社会側がより一層外国人住民への理解を深めるために、取組2で行うプロジェクトワークの成果を発表する。発表会は、外国人学校と共催で行っているU-ToC文化祭で行い、若者の保護者と地域住民のどちらにも広く発信する。発表会後は交流会を行い、相互理解を深める機会とする。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		浜松市外国人学習支援センター(U-ToC)が外国人学校と共催で行っている文化祭で発表会を開催し、若者の保護者や地域住民へ呼びかけるほか、市内小中学校、高等学校、公共施設等市内全域へ参加を呼びかけ連携を深めた。									
取組による日本語能力の向上		取組2で調べた「日本で気になること」を発表するにあたり、結果を考察したり感想を述べるための文章整理や表現力を養うほか、人に伝わる伝え方も学ぶ機会とした。また、発表会後の交流会で質問に答える機会も作り、コミュニケーションの取り方についても学んだ。									
参加対象者		地域住民、外国人保護者、静岡県立浜松湖南高等学校英語科1年生、ムンド・デ・アレグリア学校					参加者数 (内 外国人数)		201人(100人)		
広報及び募集方法		HICE NEWS、広報はままつ、HP、フェイスブック等を活用し広報を行った									
開催時間数		総時間 計3時間45分(空白地域0時間)				内訳 (11月24日-60分)(11月29日-75分)(1月17日-90分)					
主な連携・協働先		外国人学校ムンド・デ・アレグリア、静岡県立浜松湖南高等学校、雄踏そば打ち同好会、雄踏地区民生委員・児童委員協議会、With U-Net									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
			88					12		101	
※該当する場合のみ											
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	平成30年11月24日 (土) 10:00～11:00	60分	浜松市外国人学習支援センター	70	成果発表会(日本語版)	・これまでの日本語プロジェクトワークで調べた内容を日本語で発表する ・2クラス同時開催 ・青い月クラス(プレゼンテーションと質疑応答) ・あかつきクラス(プレゼンテーション3人、ポスター発表4人)		コーディネーター:坂本勝信、中田貴子、敷浪のぞみ	講義補助者:森川晴美、八木さつき、内山夕輝		
2	平成30年11月29日 (木) 13:45～15:00	75分	浜松市外国人学習支援センター	88	発表会&交流会(複言語版)	・静岡県立浜松湖南高校英語科1年生とムンド・デ・アレグリア学校高等部学生を招き、発表会と交流会を行う ・あかつきクラスより、日本語発表(ポルトガル語資料付き) ・青い月クラスより、スペイン語発表(日本語資料付き) ・ミックスグループで意見交換		中田貴子、敷浪のぞみ	講義補助者:森川晴美、八木さつき、内山夕輝		
3	平成31年1月17日(木) 13:00～14:30	90分	浜松市外国人学習支援センター	43	発表会(母語版)	・ムンド・デ・アレグリア学校高等部学生を招き、発表会を行う ・青い月クラス、あかつきクラスは自身の作品(ポスター等)の前で、母語で発表		中田貴子、敷浪のぞみ	講義補助者:内山夕輝		

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第1回 平成30年11月24日(土)】発表会(日本語版)

これまでの成果を発表する機会となった。当初の計画通り、文化祭の日に発表をするということを伝えてあったため、学習者たちの心構えはできていたように思う。青い月クラス、あかつきクラス共に、発表会を目指して準備を行ってきた。

青い月クラスでは、日本語で気持ちを述べることや、結果からの考察を日本語でまとめるまでに時間がかかってしまったが、補助講師によるサポートを取り入れながら、それぞれのグループで仕上げる事ができた。

あかつきクラスでは、時折欠席があったり、忘れ物があったりと進捗に個人差が出ていたが、それぞれのペースで進め、最終的に全員が発表会に向けて仕上げる事ができた。

どちらのクラスも発表会に向けての練習を重ねる中で、だんだんと口が回るようになっていたり、身振り手振りがついたりしていった。

発表会では、二つの会場に分かれて行った。発表形式や、進行者についても、それぞれのクラスで話し合いで決めた。

発表会には、U-ToCポルトガル語講座の受講生らが参加した他、一般の来場者や生徒の保護者らも集まり、発表に耳を傾ける様子が見られた。

両クラスの講師からの報告によると、本番が一番上手にできていたそう。緊張しながらも、発表を無事に終えたことは今後の自信につながるだろう。

青い月クラス |

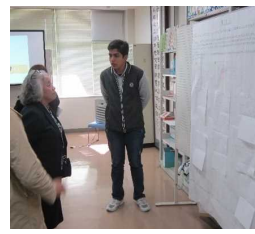
・ペアもしくはトリオで、プレゼンテーション形式(4組)

・発表の後に、フロアからの質問タイムあり(質問は、ポルトガル語講座講師に翻訳してもらった)

あかつきクラス |

・プレゼンテーション4人、ポスター発表3人

・発表後の余った時間で、聴衆とのやり取りあり



○取組事例②

【第2回 平成30年11月29日(木)】発表会 & 交流会(複言語版)

当初計画にはなく、偶然にも、県立浜松湖南高校、ムンド・デ・アレグリア校の年間カリキュラムの中で、この日この時間なら、実現可能そうだとということで急遽、追加で決まった発表会 & 交流会であった。非常に厳しい条件(会の時間が短い、日本語・ポルトガル語・スペイン語を話す学生が一堂に集まる)の中で、コーディネーターの坂本氏や岡氏、敷浪講師、中田講師らと誰が何語で発表するか、何人発表するかなど何度も検討した。

形式 | プレゼンテーションを聞き、その後グループディスカッション

- ・発表者 Mさん(あかつきクラス、ブラジル、高2) 日本語での発表+ポルトガル語の資料
- ・発表者 Tさん(青い月クラス、ペルー、高2) スペイン語での発表+日本語の資料
- ・グループ構成は、湖南高生+ムンド生+プロジェクトワーク学習者
- ・プロジェクトワーク学習者には両校の架け橋的な役目を期待

発表者の2人は、プロジェクトワークを代表して、非常に多くの生徒の前で発表を行ったが、24日の発表での反省を活かし堂々と発表をしていたように思う。日本語で発表をしたMさんは、講師からアドバイスを受け、スピードを落とししたり、はっきりした声で話したりすることができていた。スペイン語で発表を行ったTさんは、時間がない中、母語で原稿を用意し、ムンド校の教員に発表指導を受け臨むこととなった。当日は、ベアの生徒が欠席というハプニングもあったが、自信を持って説明できていたように思う。



(2) 目標の達成状況・成果

一番の成果は、急遽決まり、何とか実施にこぎ着けた複言語版での発表会である。公立学校の高校生、外国人学校の高校生らが一同に介し、共に時間を共有できたことは大きな意義があった。特に、発表後のグループディスカッションでは、グループ内の複言語の環境で、感想を述べ合ったり意見を交換したりするのは高校生らにとって非常にもどかしい時間だったに違いない。しかし、アンケートのコメントにもあるように、生徒らはこの時間から、コミュニケーションの難しさと楽しさの両方を学べたように思う。湖南生のアンケートを見ると、今回の経験から、これまでより一層英語への学習意欲が高まった生徒や、日本に住む外国人の気持ちに心を寄せた生徒がいるなど、異文化への理解が深まった様子が述べられていた。ムンド校の生徒からは、今後も日本人生徒との交流を望む声が上がっていた。普段マイノリティーとして暮らす彼らにとって、マジョリティー側の言語(日本語)だけでなく、お互いの母語が飛び交う中で、対等なコミュニケーションを実感する良い機会だったと思う。

その他に、今回の学習会 & 交流会を通じて、日本の若者と、ブラジルやペルーの若者では、コミュニケーションスタイルの好みが違うということを感じた。例えば、日本の若者はどちらかといえば「書く」ことでの表現を得意とするが、ブラジルやペルーの若者は「話す」ことでコミュニケーションをとることが得意である。こうした違いを、活動を通じて自然に気づき、お互いに歩み寄りながらコミュニケーションが取れるようになると、まさにグローバルな人材になるのではないかと感じる。

今回の発表会 & 交流会は、日本語プロジェクトワークの延長上に偶然生まれたものだが、今後例えば、異文化理解プロジェクトワークに発展させると、日本人の生徒とブラジル人やペルー人の生徒が外国語でのコミュニケーションや異文化理解を学べる良い機会になるかもしれないと感じた。

(3) 今後の改善点について

文化祭での発表会は、多くの人に聞いてもらえるというメリットはあるが、当日のスケジュール的に、生徒らにはせわしない時間となってしまう。2回目の発表会 & 交流会も同様に時間が全然足りなかった。学校行事との同時開催なので仕方がないが、もう少し長い時間が取れると、聴衆や他の生徒とのやりとりがもっと増えて良いと思う。また、青い月クラス、あかつきクラスが互いに発表を見合う時間が取れなかったのは残念であった。

今回の連携事業より、「学校」という機関は年間行事や、カリキュラムを元に動いており、年度の途中で何かを組み込む事は容易ではないことがよくわかった。今後は、それを踏まえて計画の段階から連携できるよう取り組んでいきたい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

1990年以降、浜松市は日系ブラジル人を中心とした外国人集住都市として多文化共生社会の構築を目指して事業を展開している。行政を中心に様々な取組がなされているが、特にこれからの浜松を担う重要な構成員となる次世代の育成・支援に力を入れており、第2次浜松多文化共生都市ビジョンでも重点施策として取り上げられている。そうした中、これまでの取組がブラジル政府からも評価され、2020年東京オリンピック・パラリンピックにむけて、ブラジル柔道チームのほか、ブラジルパラリンピックチーム全種目の事前合宿地として、数百人規模の選手団を受け入れることとなった。このことを契機に、浜松市で生まれ育つ外国にルーツを持つ若者が、外国と日本の両方の文化をいかして活躍する地域づくりを行いたいと考える。

平成30年度は、外国にルーツを持つ若者が、ボランティアやイベント等の活動で必要な日本語や日本社会におけるマナーを学んだり、自身の生まれ育った地域の文化や地理、歴史等の魅力について学んだりするための浜松グローバルユース養成講座(仮称)について検討を行う。翌年度には開発した養成講座を実施しグローバルユースの育成を行う。その後、2020年東京オリンピック・パラリンピックで彼らがボランティアやイベント等への参加で関わりがもてるよう、行政、学校、民間組織等と連携し、活躍の場の創出についても検討を行いたい。

本事業を通じて、外国にルーツのある若者の存在やその潜在価値を広く顕在化し、地域における雇用や教育の場の受入拡大など、地域の多文化共生化をより一層深めることを目指していきたい。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

取組1のグローバルユース養成講座については、グローバルな視点を持つ若者を養成するという目的のもと、2020年東京オリンピック・パラリンピックを良い機会ととらえ、それに関連のある内容の企画を検討した。会議の途中で、テーマをブラジルと絞る可否かで議論が紛糾したが、最終的にはこれまでの外国人集住都市としてのノウハウを活かすという考えで、ブラジルに特化することで決定した。この議論の内容は、今後、日本が外国人受入れ拡大をする中で、浜松市にも押し寄せてくる変化の波を先取りしたととらえている。来る転換点を迎えるにあたり、今回の議論を活かしていきたいと考える。

取組2の日本語プロジェクトワークにおいては、講師、コーディネーターが頻繁にインターネット会議を行うことができたため、カリキュラムを進捗状況に応じてその都度見直すことができたのが良かった。また、二つのレベルに分けてクラスを設けることで、外国人学校に通う若者の日本語に関する実態や、環境整備の難しさなどの課題も見えてきたのは大きな成果だと考える。そのような中、彼らが将来日本で社会人として生活するうえで必要な力について、発展的に議論ができたことも良かった。学習者への効果として、高校卒業後の進路が未定だった者のうち、当協会の日本語教室で継続して学ぶことになった者がいる。また、プロジェクトワークを通じて県立高校と交流したことで、もっとコミュニケーションを取りたいと学習意欲が向上した者もいることから、引き続き日本語プロジェクトワークを取り入れていきたいと考える。

取組3の発表会については、日本語プロジェクトワークにおける学習目標として設置していた通り、日本語を使って、意見をまとめ発表するということが実施できた。発表までの準備を通じて、日本語の使い方だけではなく、人前での立ち振るまい方、課題を仕上げるための計画を立てたり実行したりすることなども学べた。また、急遽、地域の県立高校英語科と複言語での発表会&交流会を行ったり、外国人学校での母語の発表会を行ったりすることができたのは、非常に大きな成果だと考える。プロジェクトワークをきっかけに、学校単位での学習交流が進んだので、今後はさらにこの交流を深めるような連携を図り、定番化していきたい。

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

連携して日本語教室の運営を行うためには、授業を行う日本語講師だけではなく、コーディネーターの役割を担う人物が各機関に必要であることがあらためて感じられた。連携の成果として、民間の外国人学校と公立の高等学校に事業協力してもらったことで、学校組織のスケジュール感や年間の動き方が見えてきた。一過性ではなく、持続可能な連携のためには、信頼を積み上げながら計画を立てることが必要なこともわかった。今回一緒に仕事をすることで、当協会についても理解してもらった機会になったのは良かったと思う。内外の調整をし、事業を円滑に進めるための体制づくりを強化できるよう引き続き検討していきたいと思う。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

日本語プロジェクトワークの中にあるアンケートやインタビューを通じて、地域住民が外国にルーツのある若者らと日本語で触れあう機会になった。また、発表会を通じて、若者らの日本での暮らしや日本語環境を広く知らせる機会となった。このように学習をきっかけとした接触場面を作ることで、地域住民への理解促進ができたと考える。

(5) 改善点、今後の課題について

連携は言葉としては便利だが、他機関が円滑に連携を行うには、相当綿密なコミュニケーションが必要である。しかし、細かいやりとりや気遣いは目に見えにくく、難しさの本質が伝わりにくいのには残念である。今回はコーディネーターという役割がついたためそれぞれの機関と連携が取れ、また、単発的なイベントだったため交流も成功したと言えるが、今後事業を定番化するためには、計画の段階から相手先と対話を進め、負担が偏重しないように検討する必要がある。

事業全体を見ると年度を通して滞りなく進めることができたが、取組1で企画した養成講座が予算の獲得に失敗したため、次年度での実施が保留になってしまったのが悔やまれる。しかしながら、取組2や3の実施を通じ、外国人学校に通う若者の日本語使用環境が見え始めたことを成果ととらえ、今年度つながったパイプをいかして、地域全体での外国にルーツのある若者の育成体制づくりに取り組んでいきたい。

(6) その他参考資料

- ・浜松グローバルユース養成講座カリキュラム案
- ・20181124日本語プロジェクトワーク発表会チラシ
- ・20181129発表会交流会表紙
- ・20181129発表会交流会アンケート集計表(ムンド生)
- ・20181129発表会交流会アンケート集計表(湖南生)